

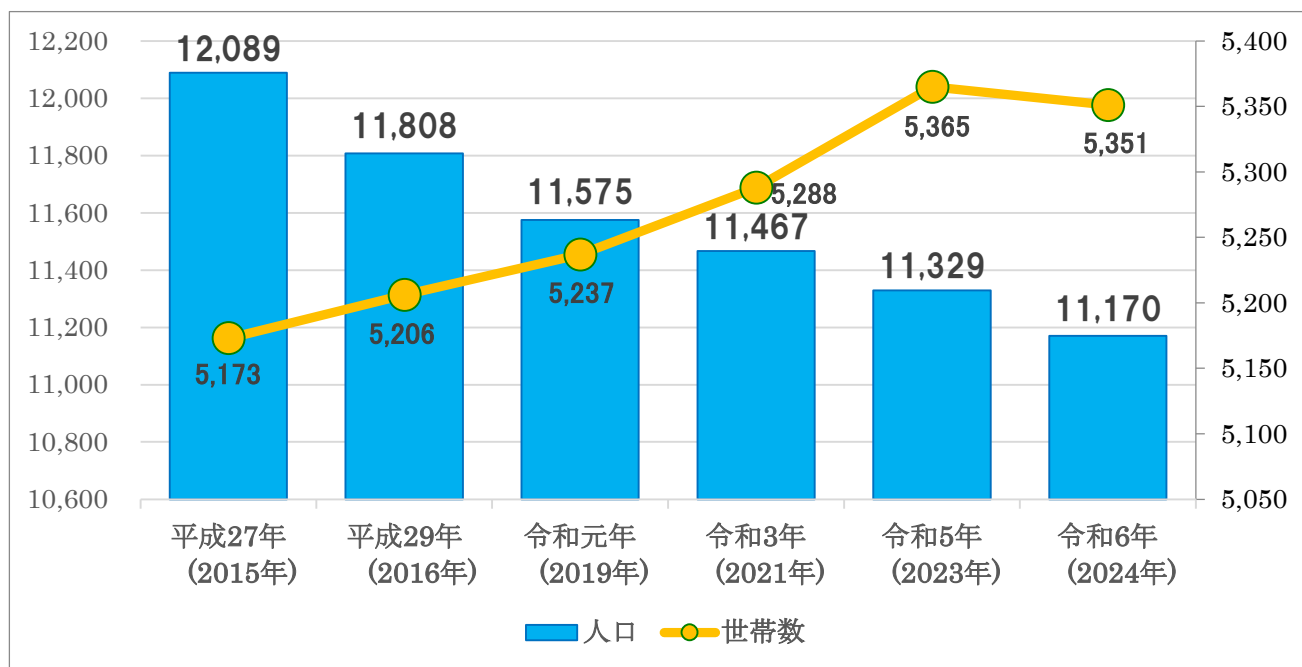
不二見地区 カルテ

データについて

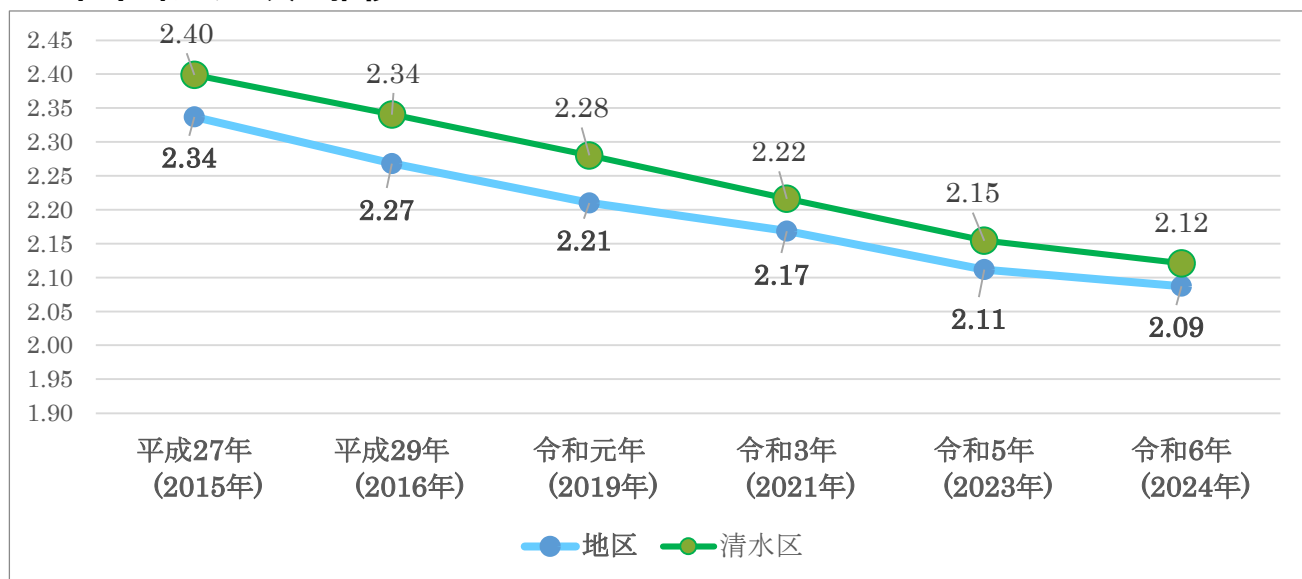
- ・カルテは住民基本台帳と自治会加入統計を利用しています。
- ・住民基本台帳は各年の3月31日の数値、自治会加入数は各年の4月1日の数値です。
- ・町名は住民基本台帳を採用しているので、自治会名と一部異なる場合があります。

不二見地区の人口特性 令和 6 年 3 月 11,170 人 5,351 世帯 2.09 人/世帯

●人口・世帯数の推移



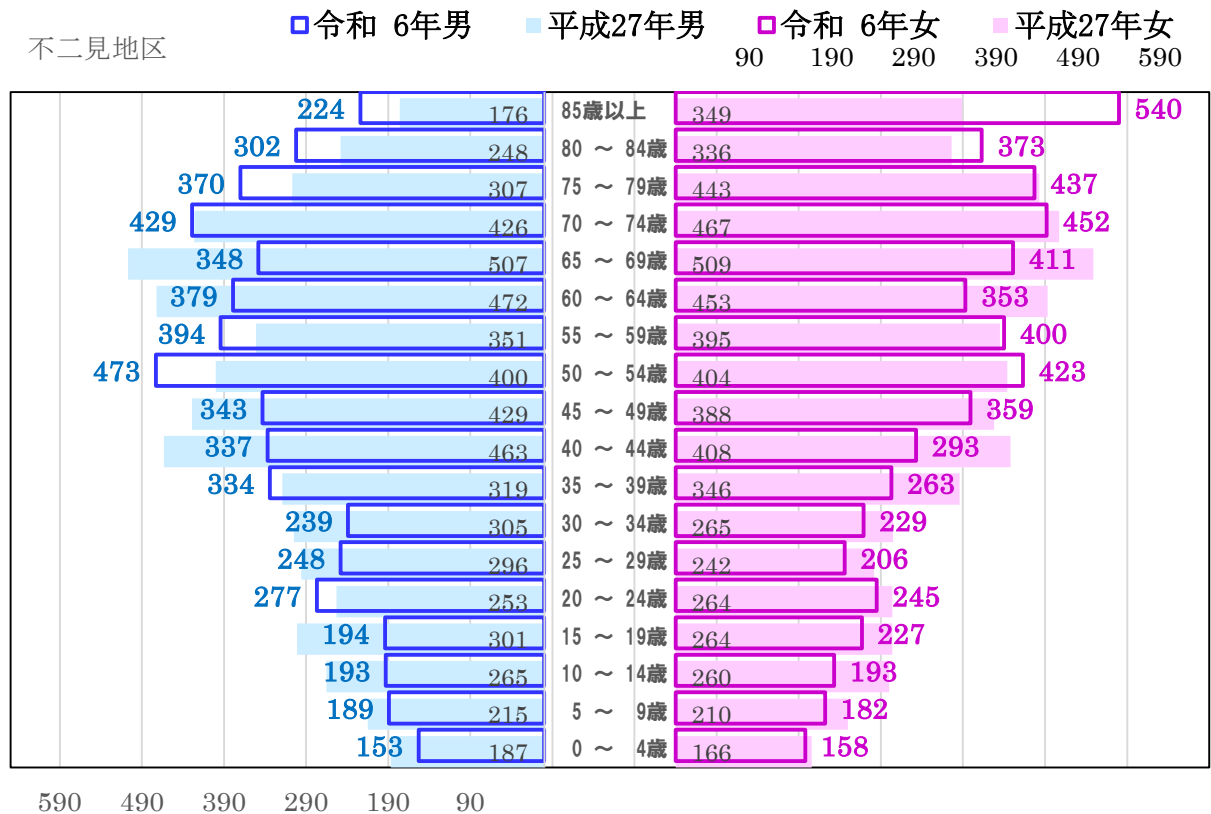
●一世帯当たりの人口推移



●65 歳以上の高齢者を支える生産年齢層 (15-64 歳)

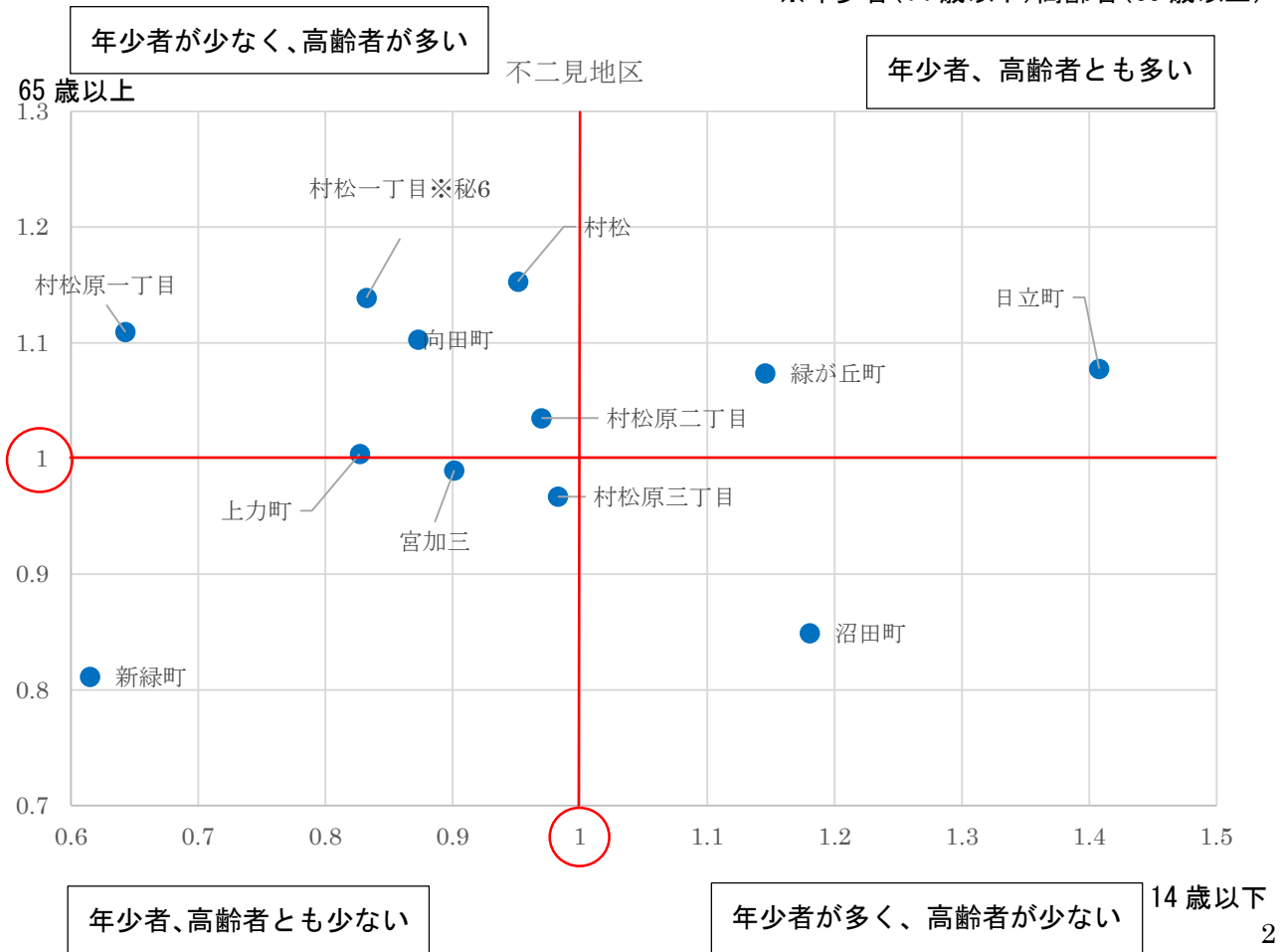
区 分	平成 27 年 (2015 年)	令和 6 年 (2024 年)
地 区	 1.86人	 1.60人
静岡市	2.16 人	1.87 人
清水区	1.98 人	1.70 人

●人口ピラミッド【平成 27 年（2015 年）と令和 6 年（2024 年）の 5 歳階級別男女別構成】



●町別の 14 歳以下と 65 歳以上の割合分布（清水区の平均値を 1 とした場合）

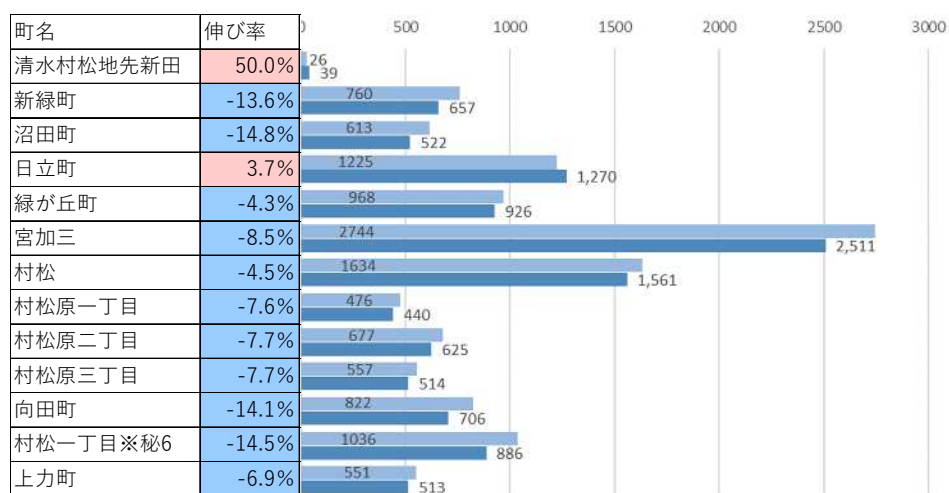
※年少者(14 歳以下) 高齢者(65 歳以上)



●町別の伸び率と人口推移

【平成27年（2015年）と令和6年（2024年）の比較】

人口推移グラフ（上段平成27年 下段令和6年）

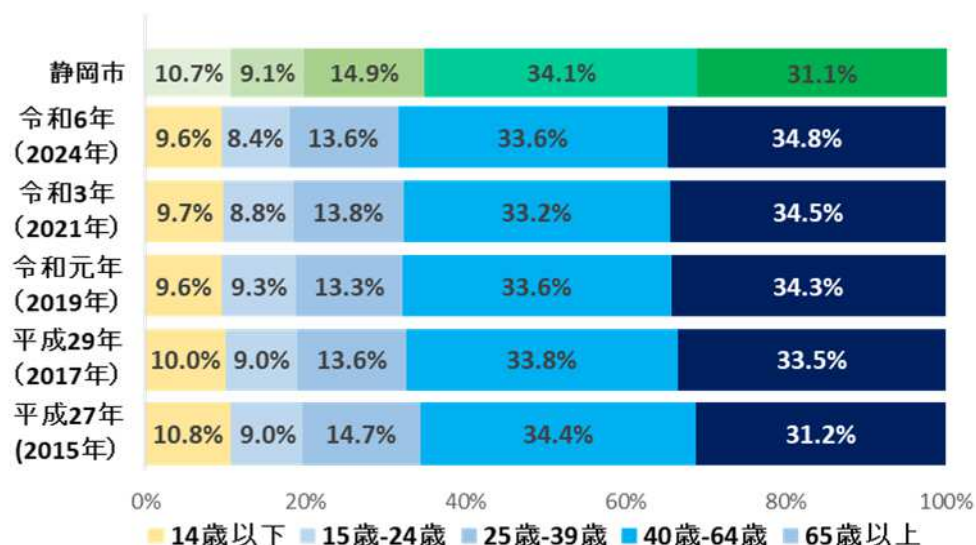


		人 口	
		平成 27 年 (2015 年)	令和 6 年 (2024 年)
不二見地区	-7.6%	12,089	11,170
静岡市	-5.3%	713,564	675,610

注)「清開二丁目」は秘匿事項で「村松一丁目」に含まれています。

●町別人口区分別割合

・年齢5区分別人口割合の推移



※15-24 歳は高校から社会人(大学修士課程含む) 25-39 歳は社会人(大学博士課程含む)

・令和6年人口3区分別：

市の割合より

青字 14 歳以下の割合が低い場合

赤字 65 歳以上、75 歳以上の割合が高い場合

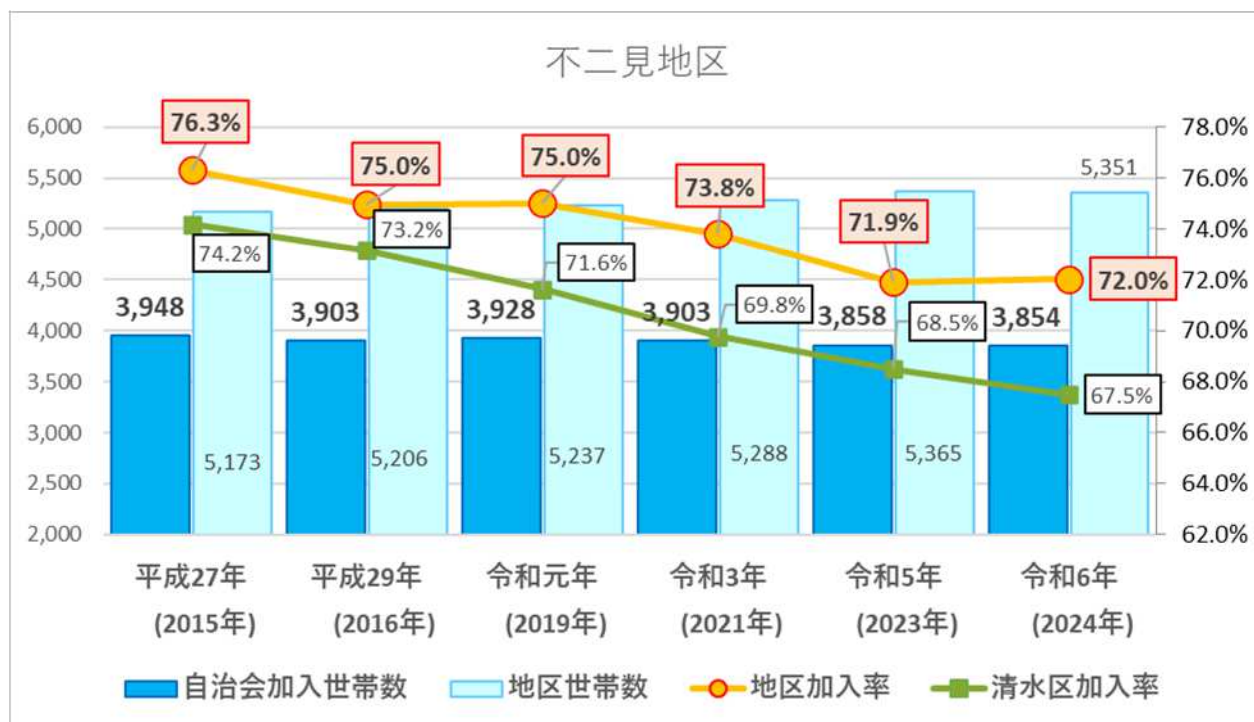
町 名	令和6年階級別割合		
	14歳以下	65歳以上	そのうち75歳以上
清水村松地先新田	0.0%	66.7%	51.3%
新緑町	6.1%	27.1%	16.9%
沼田町	11.7%	28.4%	15.1%
日立町	13.9%	36.0%	21.0%
緑が丘町	11.3%	35.9%	21.8%
宮加三	8.9%	33.1%	18.1%
村松	9.4%	38.5%	22.5%
村松原一丁目	6.4%	37.0%	23.0%
村松原二丁目	9.6%	34.6%	19.5%
村松原三丁目	9.7%	32.3%	17.9%
向田町	8.6%	36.8%	21.0%
村松一丁目(清開二丁目含)	8.2%	38.0%	22.0%
上力町	8.2%	33.5%	20.1%
不二見地区	9.6%	34.8%	20.1%
清水区	9.8%	33.0%	19.3%
静岡市	10.7%	31.1%	18.0%

注)「清開二丁目」は秘匿事項で人口等は「村松一丁目」に含まれています。

●自治会加入状況

令和6年

加入率	地 区	72.0%	加入世帯数	3,854 世帯
	清水区	67.5%	住民基本台帳世帯数	5,351 世帯



不二見地区コメント

- ・人口と世帯数とも減少傾向を示しています。世帯人数が減少していることから、単身世帯や小家族化が進んでいるようです。
- ・人口減少地区はほとんどですが、平成27年と令和6年の比較で、50%増加している地区(清水村松地先新田)、3%以上増加している地区(日立町)が見られます。
- ・令和6年の65歳以上を1人支える生産年齢(15歳から64歳)が市の1.9人より少ない1.6人で減少傾向にあり、若い世代の地区や自治会活動等への負担が増えることが見込まれます。
- ・さらに、自治会の加入率は区の値68%より高い72%ですが、減少傾向が見られます。

不二見地区

地名のゆかり

不二見という地名は、古くからあったわけではありません。明治22年、南矢部、北矢部、村松、駒越、宮加三、蛇塚、増、下清水、船越の各村が合併したとき生まれたものです。

合併してできた新しい村を”有渡郡不二見村”と名付けた理由として、不二見村誌（大正2年）に、「駿河湾、三保みさきを隔てて富士と相對し、眺望絶佳なるをもって、かく名付け、将来無二の模範的自治体とならんがため、不二見の文字を用いた」と述べられています。

宮加三にある有名な天王山遺跡は、縄文時代のものですが、遺物が重層的に存在していることから、数千年にわたって、私たちの祖先が住んでいたことと想像されます。後ろに有度山をひかえ、遠くに富士をながめるこの地は、古代の人たちにとっても、絶好の生活の場だったのです。

この天王山遺跡の近くには、かつて“西行筆捨ての池”と呼ばれる池がありましたが、そこには、「鎌倉時代の歌人西行法師が、清見潟をながめたとき、あまりの美しさに歌が詠めず、筆を捨てた」という伝説があります。

昭和28年の宮加三
(手前は天王山遺跡)



天王山遺跡

第二次世界大戦中、日本平登山道入口付近の日立製作所の建設現場で、土器の破片が見つかり、ここに古い遺跡のあることが分かりました。当時は調査する余裕がなかったため、昭和26年から28年にかけて発掘したのが、この天王山遺跡で、その後も何回か発掘されています。

この結果、縄文時代晩期の住居跡を始め、棒状石斧、石皿、石鏃、小玉の耳飾り、香炉型土器、土偶など、古代人の生活をしのばせる貴重な品が数多く出てきました。しかも、出土品が、それぞれ、時代の違う層から出てきたため、縄文時代から古墳時代まで、数千年にわたって、人々の生活が繰り返されたことが分かりました。

この辺りは、有度山からの土砂が積って、ゆるやかな斜面となっているため、古代人の生活には絶好の地だったのでしょう。繊維性の腰巻きやフンドシを身にまとい、軽石や焼物で作った耳飾りを付け、照葉樹におおわれた有度山で、日本鹿、イノシシ、野ウサギなどを追っている先祖たちの姿が目浮かぶようです。



発掘中の天王山遺跡

清水みなど道

村松の消防第5分団から、南へ100メートルほど行ったところの三差路の角に、古い石の道標が立っています。これには、東を向いた面に「清水み奈登道」、南面に「南久能山道」、西面に「江志里海道」と彫ってあり、指の形で方向が示されています。その昔、ここが、清水みなどから来る清水みなど道と、当時の幹線道路だった久能街道との合流点だったのです。清水みなど道は、この地点から、現在の清水総合グラウンドの西側に沿って北へ進み、美濃輪町方面へ通じていたようです。みなどから、久能山や駿府への往来に大いに利用されたことでしょう。

この道がいつ造られたかは、はっきり分かりませんが、道標が刻まれたのが江戸末期の天保年間と想像できることから、それ以前からあったことと思われます。

なお、昔は、海岸線が今よりもずっと深く入り込んでいて、この道のすぐ近くまで来ていたようです。



村松にある道標

三 沢 館

三沢氏の居館と推定されている。時代は平安末期から。宮加三の西方、有度山の麓に寺家山というところがある、遺構など完全に消滅している。

言いなり地蔵尊

現在地は、妙音寺地先に在って、妙音寺堤（白貝谷堤）を左へ登ると、大きなもちの木の本根に小さな地蔵堂があります。その中に白い肌着をつけ、毛糸の帽子をかぶったかわいい地蔵様が立っています。この地蔵様は元来は鉄舟寺の墓守り地蔵様でありました。

ある時代、病弱の婦人の夢の中に、お地蔵様が現れました。婦人が夢の中に見た場所へ来てみたところ、荒れ果てたお地蔵様が立っていました。以来、この婦人はお地蔵様の供養に努めたところ、次第に健康を取り戻し、幸せになったと云われております。

この地蔵様は、どんな願いごとでも聞いて叶えてくれるということで、「言いなり地蔵」と言われるようになりました。現在は、願いごとを叶えてくれるお地蔵様として、参詣の人が絶えません。



言いなり地蔵尊

「薄墨の笛」

今からおよそ850年前、平治の乱が起こり平清盛が戦いに勝ちました。この時、源氏の大將源義朝は殺されましたが、14歳だった源頼朝は伊豆の蛭が小島に流され、7歳の牛若は鞍馬の寺へ入れられました。

牛若の母、常盤は『淋しくなったら父上様のこの形見の笛をお吹き。父上様はとてもこの笛がお好きでしたよ』と言って小さな横笛を牛若に渡しました。

鞍馬に行った牛若は、よく勉強し、そして、山深い谷間で 天狗を相手に「エイ」「ヤー」と木刀で剣の稽古を続け上達しながら、10年の年月を過ごしました。この頃、京の都で弁慶と出会い、弁慶は牛若に忠節を尽くすのです。30歳半ばになった源頼朝は後白河上皇と手を組み、鎌倉で平家を討つために旗揚げし、弟の義経に大軍を与えて出陣させました。

義経は一ノ谷の鶴越の合戦、屋島・壇ノ浦の戦いと連戦連勝し、平家を滅ぼしてしまいました。

平家追討の功労者となった義経は、法皇から武士として最高の位『検非違使の左衛門の少尉』という位を授けられ、兄頼朝に断りもなく位についてしまい、頼朝を怒らせてしまいました。

義経は反逆するためのものではないと誤解を解くために鎌倉に行きましたが「腰越」に留められ、頼朝は義経に会おうとしませんでした。義経は自分の気持ちを訴える手紙を涙を流しながら書きました（腰越状）が、頼朝に思いは届きませんでした。重い足取りで都に帰る事になった義経は、失意の余り落胆し、これまで大切にしていた「薄墨の笛」を、久能寺に奉納しました。

「久能寺なら、自分の形見を預けても頼朝は手を出すことはないだろう、そして笛を守ってくれるだろう」と考えたのではないでしょう。

鉄舟寺の前身の久能寺は歴史が古く、現在の久能山東照宮のある場所に、駿河の国主久能忠仁によって創建されました。奈良時代の初期に行基上人によって寺は栄えましたが、戦国時代、武田信玄が城を築くために、久能寺を現在の鉄舟寺のある場所に移しました。

明治16年山岡鉄舟によって再興され、今川貞山師を開山に迎えて、臨済宗鉄舟寺と改められました。そのため、鉄舟寺には国宝「久能寺経」を始め「薄墨の笛」など、多くの重要文化財が所蔵されています。



かたりペクラブ提供